古墳壁画・墓誌等にみる朱雀・鳳凰の図像について

網干善教

一

二〇〇一年三月二十二日、奈良県高市郡明日香村阿部山所在のキトラ古墳の石槨内にデジタルカメラを挿入して写真撮影が行われたところ、横口式石槨の閉塞石にあたる南壁の内面に、四神図のうちの朱雀図が描かれていることが判明し、これが我が国における古墳壁画としてはじめての検出であり、話題となった。

キトラ古墳と同じ明日香村平田に所在する高松塚古墳は一九七二年三月実施の発掘調査により横口式石槨内に星辰、日・月、四神、人物像が描かれていることが判明した。[1] これをめぐって、考古学のみならず、古代史、民俗学、美術史等多くの研究分野からの考察が行われ多大の関心を集めた。キトラ古墳での壁画の検出は、この高松塚古墳の壁画との比較が注目され、今後の研究成果に期待するところがあった。ただ、残念ながら、高松塚古墳では四神図のうちの南壁にあたる壁面に朱雀図が残存していなかった。その理由として当初から南壁には朱雀図が描かれなかったという説と、そうではなく、四神図が描かれたが、古墳盗掘による南壁の毀損によって描かれていた朱雀図が消滅したとする考え方があった。拙考は後者の立場をとり、四神のうち朱雀図のみ描かれなかったとする考えは成立しないことを繰り返し述べてきたところであるが、これを実証することは至難であった。ところが、キトラ古墳での朱雀図の検出により、高松塚古墳でも同様朱雀図が描かれていた可能性が極めて高いことを示唆することになった。[2] そこで今回確認したキトラ古墳の朱雀を中心にアジアにおける壁画古墳の朱雀図について所見を述べることとする。その前提として四神における朱雀図と四神図ではない鳳凰図との関連について若干の私見を述べておきたい。

今回キトラ古墳での確認された四神図のうちの朱雀図は、南壁内側の中央上部に一羽の鳥が描かれている。著名な奈良薬師寺の本尊薬師如来像の台座に表現された四神像の朱雀も一羽である。よく引合いに出される正倉院蔵の十二支八卦背円鏡の朱雀像も一羽で表現されている。

朝鮮半島では百済の公州宋山里第六号墳の南壁面の見上げ部に描かれた朱雀図も一羽である。それに対して朝鮮民主主義人民共和国（以下朝鮮共和国と略す）の首都平壌の西郊にある高句麗古墳、江西三墓のうち大墓と中墓に描かれた朱雀図は、横穴式石室の両袖部に描かれた左右対称的な二羽の鳥である。

鴨緑江中流域にある集安五盤墳五号墓は実見するところ横穴式石室の

両袖部に対置する二羽の朱雀図である。この五号墓の西に隣接する四号墓は現在閉塞されていて実見できないが、五号墳と同様、横穴式石室の両袖部に描かれた朱雀図であるとする。この五号墳の北側に近在する四神塚においても同様、玄室の両袖部に描かれている。このことについて『通溝』の四神塚の項に「羨道に穿たれている玄室の南壁、其の南壁の左右に畫かれた双鳳は、朱雀を表したものである」と記している。[3] この記述で注目すべきことは「双鳳は朱雀を表すもの」とすることである。

簡野道明著の辞書『字源』[4] によれば、「雄を鳳、雌を凰といふ」とし、「鳳はおほとり、ほうわう。聖人が世に出づれば、之に応じて見はれるという瑞鳥、梧桐に非ざれば棲まず、竹実に非ざれば食はず、醴凰泉に非ざれば飲まず、羽毛五色にして声五音に中り、世に道あれば見はれ、飛べば群鳥之に従ふという」と解説している。諸橋轍次著『大漢和辞典』も全く同文を挙げている。[5] 集安四神塚等の壁画をみれば、墓室内に数多くの鳥が描かれているのを見る。

左右対象に鳥を表したものは、直接朱雀を意味するものではないにしても、中国宝鶏市の名刹法門寺の地下宮殿の楣石に彫刻された相対する双鳥も、我が国では京都宇治平等院の鳳凰堂にも見ることができる。ただ雄雌を鳳凰とするならば法門寺や平等院は鳳凰であるが、鳳も、凰も「おおとり」とするならば一羽であっても鳳凰であり、同時に朱雀であってもよいのではないかという解釈も可能である。但し、四神の場合は「朱雀」であるとしなければ意味をなさない。なお、前出の簡野著『字源』よれば「隹」は「短き尾の鳥の総名」とあり、「鳥」については「禽の長尾なる者。又すべて両翼二脚ある動物の総称とす」とある。但し、白川静氏は『字統』[6] のなかの「隹」の項で『説文』にみる「鳥の短尾なるものの総名なりという」を挙げ、さらに「卜文では、鳥は鳥星のように特定の神話化されたものを図像的にしるし、他の鳥はすべてこの形にかき、尾の長短によるものではない」とも記す。また、「鳥」の頸においても「隹形のもので、尾の長短にはかかわりなく、その示し方の上に意識があるものとみられる」と記している。また、朱雀と鳳凰の関係については、白川静氏の『字統』の「鳳」の項で「鳳」の字形には、大きな羽に多くの眼飾を加えているものがあって、鳥としては、孔雀がその原形に近いものと思われる。鳳凰はのち瑞祥化され」とされ、鳳凰の原形は孔雀であろうという見解を述べられている。

本稿では四神（思想）に基づく朱雀を中心に鳳凰乃至は双鸞（鸞とは「神鳥、鳳凰の属、形鶏に似、羽毛赤色に五彩を交へ、聲は五音にかなふ。一説、赤色の多きは鳳、青色の多きは鸞」とある）の表現について観察を試みようとするものである。但し、鳥には鳰や鴛のように水面を浮遊する水鳥のようなものもいるが、ここでは朱雀、鳳凰の類を聚成して、その表現を次の四姿態（四類型）に分類し考察する。

二

まず第一類型として、鳥が両脚を揃えて立つ「静止」の様態である。わが国における典型的な例としては大和壺阪寺蔵の「鳳凰塼」と称されるものの図像や正倉院宝物、宇治平等院鳳凰堂の鳳凰像のようなものを挙げることができる。

壺阪寺蔵鳳凰塼　大和の名刹、西国六番の札所として信仰の篤い真言宗豊山派の南法華寺に所蔵する鳳凰塼がある。[7] これは同じ豊山派の西国七番の札所である東光山龍蓋寺（岡寺）が所蔵する天女塼（飛天像）と対となすものと考えられている。両者共にほぼ同じ大きさの方形塼で、壺阪寺所蔵のものは方形の区画に一羽の鳥が表されている。

第１図　壺阪寺蔵鳳凰塼

鳥の形状は頭部に冠羽があり、「S」字状に曲がる頸部、左右に広げた主羽、尾羽は大きく豪壮に表現、脚は両脚共に「く」字に揃え、力強い指と爪と跗蹠を表す。高句麗壁画古墳の朱雀図に通じるところがある。姿態としては静止である。明治三四年八月二日、重要文化財に指定されている（第１図）。

正倉院八角鏡　鳥獣花背の鳳凰　北倉（四二）第一号鏡とされる白銅製の八角鏡がある。径六四・五糎、重量三三・七瓩の正倉院蔵鏡最大のものであるが、内区には円鈕を中心に、上に飛雲文と宝相華文、下に山岳文を配し、左右に宝相華にのる鳳凰を配置している。口には鐶と結紐の飾具を喰える。[8]

両脚を揃えて立ち、「静止」し、相対して鳳凰を意識していることは容易に理解できる。なお、外区には疾走する四匹の獣と、その間にある宝相華を喰む双鳥を配している。これは第四類型の「飛翔」する鳥の形である（第２図）。

円鏡　鳥獣葡萄背の鳥　正倉院南倉（七〇）、第七号鏡である。一般には葡萄鏡と称される文様の鏡で、伏獣鈕をめぐって内、外区共葡萄文の地紋を扱い、内区では獣文を、外区では禽獣文を乗せる。[8] 外区にある鳥文は羽を拡げ、双脚を前後に表現する「歩行」の姿を表している（第３図）。

第２図　正倉院八角鏡　鳥獣花背の鳳凰

正倉院　鳳凰葛形裁文　南倉（一六五―一）に収納される葛形裁文が十六枚と残欠七枚がある。

金銅板透彫で、左右ほぼ対称につくられており、宝相華文をはさんで二羽の鳳凰文が相対する。[8] 鳳凰文は共に頭頂に冠羽をつけ、眼を刻し、鋭い嘴を切鏨し、宝相を喰える。両翼羽は大きく拡げ、双脚を揃えて立つ「静止」の姿を表している。同様な裁文が他にもあり、用途は不明と

第３図　円鏡　鳥獣葡萄背の鳥

される（第４図）。

正倉院　金銅鳳形裁文

南倉（一六三）、金銅板を切透した彫板で鳳凰を形どる。[8] 口には円鐶、円形板を繋いだ垂飾を喰える。羽を大きく拡げ、両脚で立つ「静止」の表現である（第５図）。

平等院阿弥陀堂の鳳凰

宇治平等院阿弥陀堂（鳳凰堂）の建つ洛南はかつて山紫水明の地として貴族別業の地であった。長徳四年（九九五）十月、左大臣藤原道長が故左大臣源重信の遺族より買収し、宇治殿（宇治院）を建立、万寿四年（一〇二七）十二月、道長逝去後、実子関白頼通が相続し、永承七年（一〇五二）この宇治殿を佛寺となして平等院と称した。そして翌年の天喜元年（一〇五三）に阿弥陀堂を建立し、浄土世界を顕現しようとした。本尊阿弥陀如来像は定朝の作である。

第５図　正倉院　金銅鳳形裁文

第４図　正倉院　鳳凰葛形裁文

この阿弥陀堂は後世鳳凰堂とも呼ばれる如く、大棟の両端に一対の鳳凰が飾られている。[9] 鳳凰は頭頂に冠羽があり、眼、嘴、そして大きく羽を拡げ、両脚を揃えて「静止」する姿勢である。本来鳳凰は極楽浄土に住む瑞鳥とされ、阿弥陀佛を安置し、浄土世界の象徴として一対の鳳凰像で飾った。平安時代のすぐれた作品であるといえる（第６図）。

第６図　平等院阿弥陀堂の鳳凰

集安五號墳第五号の朱雀

第四号と道を隔てて東側にあり、集安では将軍塚と共に公開されている数少ない古墳の一つである。内部に立ち入ると豪華な壁画が壁面を余るところなく描かれ圧倒される。[10]

さて、この古墳は以前「通溝一七号墳」と称されてきたもので、朱雀図は石室の南壁、つまり羨道に通じる両側に左右対称に描かれている。吉林省の報告に掲載された南壁南側の写真をみると、四号墳とは異なり、大きく主翼羽を拡げるが、双脚共円形の台の上に立ち、

第７図　集安五號墳第五号の朱雀

「静止」の姿勢である。図像としては高句麗江西三墓の中、大墓に共通する姿様である（第7図）。そして報告書には、

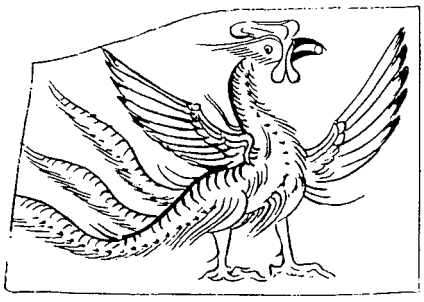
南壁為甬道隔成東西両段、各絵一朱雀、振翅相向、長尾、立足于白色的復弁蓮座上。而今蓮座已模糊難綏。西朱雀喙尖細、頂冠如火炎状、着褐地紅線、長頸作粉紅色、身紅色、双翼系平塗紅色而飾以緑、尾羽分着黄、緑、紅色。東朱雀的形象与之基本相同、只是白色的圏画的很長、向上翹出如嘴、而雀身施平行的褐、緑、紅色、腹部粉紅色、頂冠作緑地紅線。

と記している。

舞踊塚主室天井第四持送の鳥　中国吉林省集安市如山南麓の禹山下墓区にある舞踊塚の石室持送りに画かれている飛天、蓮花、麒麟などの題材のなかに数羽の鳥が描かれている。そのうち汚れが少なく残存状態のよい鳥の絵は、三本脚の鳥を描いて太陽を表現した東壁のすぐ北側にある。これは「静止」する姿を表している。[3]

頭頂に「イチゴ冠」あるいは「クルミ冠」のような冠羽があり、目、嘴、肉垂を描く。頸羽、胸羽も描き、尾羽は三つの羽で表現、両翼は大きく拡げ、風切羽をも描く。脚はしっかりと地を踏み、跗蹠も表現している。「静止」の姿勢である（第8図）。

なお、舞踊塚には頭を下げて水を飲む鳥、羽をたたみ静止する尾羽の長い鳥や人面鳥体も描かれている。



第8図　舞踊塚主室天井第四持送の鳥

三室塚壁画の鳥　集安如山南麓、禹山下墓区にある三室塚の第二室、第三室にも鳥が描かれている。特に第二室では東面第四層、南面第四層、西面第一層、西南隅第六層などや第三室の東面、西面の持送りなどに描かれていることが報告されている。[3] 大方は脚を揃え、羽根を拡げる「静止」状の形状である。そのうち第二室の東面第四層、第二室西面第一層・南面の第四層持送りの三例を挙げておく。どちらも基本的には同様形態の壁画であるが細部を見ると相違がある。

第二室東面第四層の鳥は頭頂に半円形の冠毛、頭羽があり嘴を大きく開き、肉垂を付す。尾羽は長く曳き、両翼を大きく拡げ、両脚は大地を踏む（第9図）。第三室西面第一層持送りの鳥も冠羽、嘴、肉垂共に表現され、胸は大きく張り、尾羽も長い。両脚も太く、大地を踏み、「静止」の形態をとっている（第10図）。さらに、西面第四層持送りの鳥もほぼ同じような姿である（第11図）

徳興里古墳の壁画の鳥　朝鮮民主主義人民共和国首都平壌の西方、南浦市江西区域徳興里にある壁画古墳が、一九七六年一二月八日に発見され、同一二月一六日から翌年一月二〇日までの間に発掘調査された。[11] 古墳は羨道、前室、通路、玄室と続く横穴式石室の形態で、全長約七・九二米、壁画は石室のほぼ全面に描かれており、二回にわたって実見したところ、一部剥落箇所はあるものの大部分は鮮明に残存している。

前室北壁上方に残る墓誌銘から被葬者は「釈迦文佛弟子」の「鎮」という人物で、永楽一八年（四〇八）一二月二五日、七七才で死去、翌年二月二日この墓に埋葬された。

第９図　三室塚第二室東面第四層の鳥

第10図　三室塚第三室西面第一層持送りの鳥

第11図　三室塚第三室西面第四層持送りの鳥

第12図　徳興里古墳の壁画の鳥

この古墳の鳥を描いた図像で注目すべきは、前室東側天井に描かれた絵の中に翼を拡げて静止する鳥である。眼、嘴そして頭、胸、腹があり尾羽に至る。両翼羽は大きく拡げる。脚は両脚を揃え、地に立っている。すなわち「静止」の状態である（第12図）。

高句麗江西大・中墓の朱雀図　朝鮮民主主義人民共和国平壌市西郊の約四〇粁、三暮里にある江西三墓のうち、大墓及び中墓には壁画が描かれている。[12] この壁画はことのほか著名であるが、その古墳壁画のうち四神図、特にここでは朱雀図を挙げておきたい。

江西大墓、中墓の朱雀図共に石室内より羨道に向かって左袖部と右袖部に相対して朱雀図が描かれている。左右の朱雀図は一見、相似るように見做されているが詳細を比較すると表現上の相違も見られる。

前後二回わたって実見したところ、玄室の南壁の左右袖部に相対して朱雀図が描かれている。

両壁の朱雀共に冠羽、大きく拡げた主翼、後方に尾羽があり、両脚と

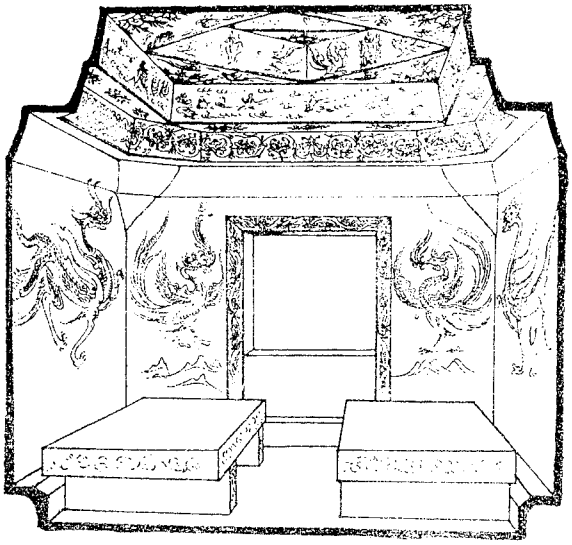
も揃えて立つ。各々の脚の下には山を描いている（第13図）。

左右袖部に描かれた朱雀図の冠羽は彎曲して大きく上にのびる。頭羽も長くゆるやかな曲線をなす。目は大きく、強く見開き、嘴には珠玉を銜える。そして顔の下には肉垂が表現されている。左右の若干の違いは冠羽は左側の方が右より立ち、頭羽も右側が長い。そして下嘴は左の方が厚くて長い。

顔部については「S」字形の頸部があり、二重の環の頸飾がある。右は白赤、左は赤黒と配色が違う。右の鳥は胸毛が多い。脚部には脚毛が細く、長く表現されている。左右共に跗蹠があり、開いた足指がある。

羽根は左右共に大きく拡げるが、羽飾の斑点の色彩が違う。右は赤色であるが、左は黒線で表されている。風切羽の表現も違う。

いずれにしても左右の鳥に表現の相違がある。しかし、これからだけでは雄雌決め難いけれど、結論的にいえば静止安定の姿態を表しているといえる（第14図）。



第13図　江西大墓の朱雀

第14図　江西中墓の朱雀

江西大墓の場合は中墓とは大きく拡げた風切羽の表現が若干異なるが、他の部分はほぼ同じで朱雀図については同系の画師、あるいは粉本によるものとも考えられるけれど、他の青龍、白虎図、特に玄武図は全く異なる形態であって同一視することはできない。

鎮江東晋画像石の朱雀　中国江蘇省鎮江市で検出された南朝東晋安帝の延安二年（三九八）銘のある画像塼墓がある。[18] この塼墓は前室と後室を通路で結ぶ形式であるが、後室は陽刻された型押しの画像塼を小口積みにして構築されている。そして壁面に用いられた塼には四神のほか、獣面鳥身・人面鳥身・獣面人身など約一〇種類の画像が表されている。

壁面にはめられた画像の中にみる獣面鳥身の文様は、頭部に双角がり、顔は面長で、後頸部には二本の曲線がある。両翼を拡げ姿態はまざれもなく鳥身で尾羽を表す三本の曲線がある。両脚は揃えて立つ。獣面とはいうものの明らかに静止の鳥身である（第15図）。

河南省鄧県画像塼墓の朱雀　河南省鄧県学庄村で出土した彩色の画像

塼墓に「鳳凰」と銘した図像がある。石室は墓室である玄室に羨道が付く構造で、塼で構築されている。[14]

彩色の墓門があり、墓門の両側には刀を持つ門卒が描かれている。墓室の壁面の塼には種々の文様や画像が表されているが、ここで必要なのは「鳳凰」と刻する鳥の文様のある塼がはめられていることである。

鳥の頭頂部には花をあしらい、鋭い眼、嘴には珠を喰み、大きな肉垂がある。胸部は誇張され、両翼羽は開き、尾羽も長大に表現されている。両脚は揃えて地を踏みしめている。鳥の全体の容姿からすると基本的には唐代にみられるものに通じる（第16図）。

この墓の築造年代は明確ではないが、五～六世紀の南朝の墳墓と推定されている。

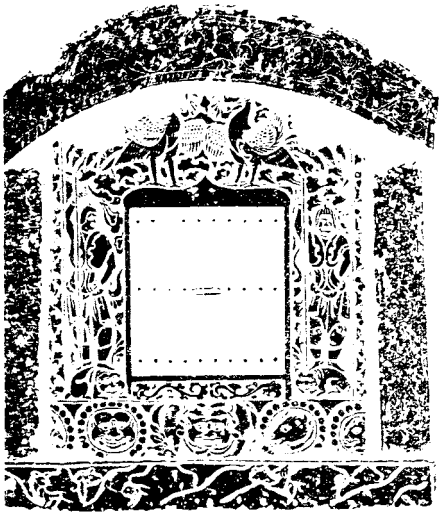
第15図　鎮江東晋画像石の獣面鳥身

第16図　河南省鄧県画像塼墓の朱雀

隋李和墓石棺の鳳凰　隋文帝の開皇二年（五八二）に築造された李和墓は陝西省三原県に所在する。[15]墓室の構造は土坑に似た素彫りの壁に白壁を塗り、彩色の壁画を描き、石棺を納める。石棺には種々の文様や絵画を施す。その石棺の小口面に対向する二羽の鳥がある。恐らく鳳凰を意識しているものと思われる。

鳥は羽根を拡げ、両脚を揃えて地に立つ姿である。「静止」の状態を表している。類例の少ない隋代、六世紀後半の事例として注目してよい（第17図）。

西安市郭家灘出土の鳥　平成一一年一



第17図　隋李和墓石棺の鳳凰

第18図　西安市郭家灘出土の鳥

月、神戸市立博物館で開催された「唐の女帝・則天武后とその時代展」に展示された鳥形の文様である。[16] 出土地は西安市東郊郭家灘で、説明によると「金の薄板を打出したもの、外形に沿って切り抜いて成形する。」としている。冠毛を付し「S」字形の頸、羽根を拡げ、尾羽を装飾的に表し、脚は上の像では左脚を少し上げ歩行のように見えるが、下の像は両脚とも揃えて地を踏み、静止の姿を表している（第18図）。

蘇思勗墓壁画の朱雀　銀青光大夫であった蘇思勗は天宝四年（七四五）死去し、西安郊外万年県長楽原に埋葬された。一九五二年その墓が発掘され、墓室には多くの人物図をはじめ朱雀、玄武の絵が描かれていた。[17]

その墓室の南壁の朱雀図は、「黄色と緑色で、形が孔雀と似ている。羽ばたき、尾を上げ、正面を向いて直立し蓮花を踏む」と解説している。

左右対称に描写され、中央に顔を置き正面から描く。胸の左右には大きく拡げた翼を描く。この翼は雨覆と風切りの羽根を表しているのであろうか。両脚は八弁の蓮華座の上に立ち、静止する。尾羽は顔の背後に大きく描かれている（第19図）。

なお、この墓の壁画には青龍、白虎は描かれていない。これはこの時代の特徴である。

高元珪墓壁画の朱雀　天宝一五年（七五六）に歿した高元珪は高州良徳の出身で、本姓は馮というが、唐の明威将軍検校左武衛大将軍の宦官であった高力士の実弟である。その高力士は宦官高廷福の養子となったため「高」を名乗った。墓主高元珪は西安東郊高楼村に埋葬されたが、一九五五年発掘された。[18]

第19図　蘇思勗墓壁画の朱雀

第20図　高元珪墓壁画の朱雀

墓の内部は墓道、天井、甬道、墓室からなる。解説では「壁画の残存するものは少ないが、盛唐から中唐までの壁画の様子を知ることができる。墓道の東西両壁には漢代及び初唐の様式を承けて、青龍、白虎が描かれ（中略）棺床の南側に朱雀、北側に玄武が描かれる」とする。

朱雀図は斜前方を向く鳥の頭頂に花形の冠毛をつけ、両眼、嘴を鋭く開く。両翼及び尾羽も大きく拡げ、両脚は揃えて円形の台の上に立つ。「静止」する姿態である（第20図）。

韋氏墓壁画の朱雀　この壁画の描かれた墳墓は一九八六年、長安城の南郊で発掘された。韋氏は唐の中宗李顯の時に韋皇后が政権を握っており、その一族が権力をもっていたといわれる。その韋氏一族の墓は韋曲原上の南北里王村あたりにあったことから、この墳墓も韋氏一族のものと考えられている。[19]

羨道部はすでに破壊され、現在は甬道と墓室が残存している。墓道、墓室には人物図、野宴図などが描かれているが、朱雀図は「棺床に向か

第21図　韋氏墓壁画の朱雀

第22図　府君張漸墓誌の朱雀

う南側の壁」に描かれているとある。

朱雀は左右対称で描き、頭頂に冠羽、そして眼、肉垂を描く。主翼羽は大きく拡げ、青色に彩り、双脚を揃えて立つ。尾羽は顔の後方に大きく描かれている。なお対面の北壁には玄武図が描かれている（第21図）。

ここに挙げた蘇思勗、高元珪、韋氏墓の玄武は共通した姿容を描いていることがわかる。そして蘇思勗墓が天宝四年、高元珪墓が天宝一四年であるから、この時期における朱雀図の表現の一齣を知ることができる。

府君張漸墓誌の朱雀　杖内教坊第一部供奉、張漸は会昌五年（八四五）西安の東郊郭家灘に埋葬された。一九五四年その墓が発見され、納められていた墓誌の蓋に四神があり、朱雀が彫飾されていた。[18]

朱雀は体を正面に向けているが、面はやや向かって左を見ている。顔には鋭い嘴があり、主翼羽を大きく拡げ、両脚は並べて大地を踏む。表現される姿勢は「静止」である（第22図）。

なお、静止の表現には側面からの描写と正面からの描写がある。本資料はそのうちの後者に属する。

三

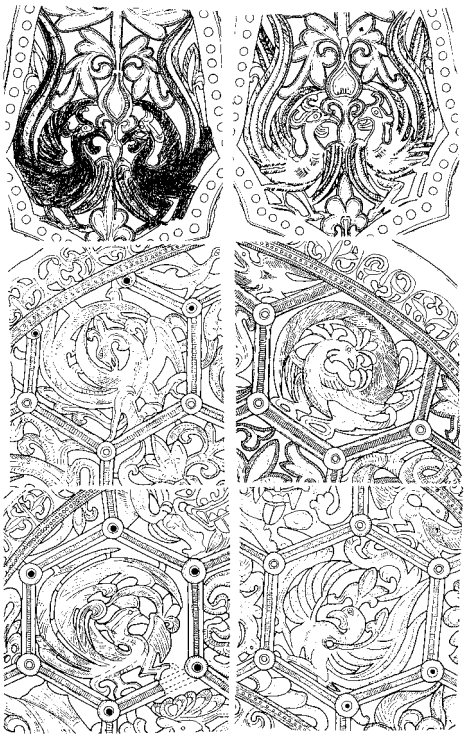
朱雀乃至鳳凰を表すのに鳥が「歩行」する姿態がある。これを第二類型と考える。見方によっては助走のようにも見えるが、実際、鳥の生態を観察すると、脚を交互に上げて前進する歩行がある。順序としては「静止」から次のステップとしての「歩行」と考えられよう。この場は一方の脚は着地し、他方の脚は曲折する図像である。

奈良藤ノ木古墳の鞍金具の鳥　奈良県生駒郡斑鳩町所在の藤ノ木古墳の第一次調査が昭和六〇年の七月から一二月の間に実施された。この発掘調査によって横穴式石室に納められた家形石棺の棺外遺物として豪華燦爛たる金銅装馬具が出土した。[19]

その馬具の鞍橋の前輪と後輪の種々の動物文が表現されていたが、なかに鳥を表した文様がある。鳥の文様は前輪、後輪共に左右のほぼ対称的な位置に彫られているが、その表現が若干異なる。

前輪を見ると向かって左側（区画四）は面を後方に下向きに表現され、眼、嘴と肉垂があり、右主翼は大きく弧状に表し、左主翼は曲げている。脚は右脚を曲げ、左足は曲げて少し上げる。

右側の鳥の文様（区画一九）は後方を向く顔であるが、左側のように下を向かない。顔には眼、嘴、肉垂があり、頭頂には三葉形文の冠羽を



第23図　奈良藤ノ木古墳の鞍金具の鳥

付ける主翼羽、尾羽を拡げる。両脚は揃えて曲げる。左右共に静止の姿勢である。

次に後輪の鳥文を見ると、ここでも前輪と同様左右対称の位置に鳥が彫られている。向かって左側（区画三三）は頭上に冠羽をつけ、顔に眼、嘴、右側の主翼羽を拡げ、左側は少し曲げる。右脚は直下におろすが左足は少しあげ気味である。一見歩行のようにも見えるが、爪部が欠損しているからよく分からない。

右側の鳥文は左側の鳥と主翼羽の拡げ方の表現が異なる。頭頂に三葉文、パルメット文の冠羽を表し、眼、嘴、肉垂をつける。主翼羽は左右共に大きく拡げる。両脚は曲げているが、区画が亀甲文の辺の部分であるので、歩行とみてよいであろう。

内区の文様の上方に二段の下向き半パルメット文があり、その下に鳥がいる。頭頂には三条の曲線の冠羽があり、顔には眼、嘴、肉垂をつける。主翼羽は大きく拡げ、尾羽をことさら図案化している。両脚は曲げて揃えている。静止のように見えるが、類例からすれば、歩行の一つの姿態とみてよい（第23図）。

正倉院宝物の鳥形文様　正倉院に所蔵する宝物、特に金工品に朱雀をはじめとする鳥の文様を扱った彫飾品が多くみられる。それらの鳥の表現のなかに歩行する様態のものがある。[8]

円鏡　八卦背十二支　南倉に収納されてきた第一三号と呼ぶ一面の鏡がある。白銅鏡で直径五九・四糎、重量五二・八瓩という正倉院鏡の中でも最も重い。

鏡の中央に伏獣形の鈕があり、それをめぐる第一圏に四神像が鋳造されている。鋳造は蝋型によるもので、本邦において製作されたものと考えられている。[8]

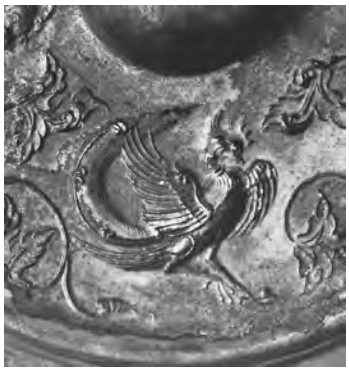
朱雀像は頭頂に蕨手文様の冠羽があり、眼を開き、嘴を表す。頸から胸はそして右足に至るまでは弧状をなし、両翼は大きく開く。尾羽も長く雄大に表現されている。脚は右脚を前に出し、左足は後に曳き、「歩行」する姿態を表現している（第24図）。

円鏡　鳥獣花背の鳥　北倉収蔵第二号鏡、径四七・二糎、重量二八・六瓩の白銅鏡である。[8]内区に二対、計四羽の鳥（鳳凰ともされる）を配するが、それらは「歩行」の姿勢と思われる（第25図）。

八角鏡　鳥獣花背の鳥　八角鏡で第一二号と称される径五一・五糎、重量二九・三瓩の大形の鏡である。南倉の鏡である。

円形鈕をめぐって内区に鳳凰文など、中区には飛鳥など、外区には双

第24図　円鏡　八卦背一二支の朱雀



第26図　八角鏡　鳥獣花背の鳥

第25図　円鏡　鳥獣花背の鳥

第27図　円鏡　鳥獣花背の鳥

鳳文などを配している。ここに挙げたのは内区の相対する鳳凰文である。[20]

頭頂に長い冠羽があり、眼、嘴そして肉垂がある。両翼は大きく拡げ、尾羽に弧を描いて上にのびる。脚は右脚を挙げ、「歩行」する姿勢であるが、頡頏の動作の前兆とも見ることができる。ここでは「歩行」の一例として挙げておく（第26図）。

なお、この鏡には飛翔の文様もある。これについて後項で述べる。

円鏡　鳥獣花背　南倉（七〇）に収蔵する第三号鏡で、表現された鳥の文様は、「S」字状の頭、頸、胸、そして大きく開く主翼羽、脚は左足を地につけ、右脚を少し上げる「歩行」の姿である[8]（第27図）。

御冠残欠の鳥形文様　北倉（一五七）に冠に付された透彫刻の遺品のなかに鳥形文様がある。向かって右向きのものは冠羽、鋭い嘴、「S」字形の体躯、大きく開いた羽根が表現されており、脚は左足を「く」字形に曲げて躍動的である（第28図）。

第28図　御冠残欠の鳥形文様

もう一点の彫刻も頭部と脚部を欠損しているから、「歩行」か「頡頏」か判断できないが、後脚の開きからみて一応「歩行」の姿としておく。同様なものは正倉院礼服御冠にも見られる。[18]

正倉院宝物御軾の鳥　正倉院宝物のなかに「紫地鳳形錦御軾」と称する織物の文様がある。頭頂部には「花形冠」と思わせるような冠毛があり、頸部には宝珠形の装飾を付ける。[8]脚は左足を地に着け、右脚をあげる。主翼羽は大きく開き風切羽根を表し、胸部には点刻文を付す。尾羽は大きく曲線を描いて上にあがる。宝珠形の頸飾は宝鶏法門寺地宮門楣の鳳凰文や高松塚古墳壁画の青龍などと共通する（第29図）。

以上は正倉院蔵宝物の数多くの中にみられる朱雀、鳳凰、鳥形文様の一部のうち「歩行」の姿態を表現する図像を挙げた。これらの遺品は年

代的にみて高松塚古墳やキトラ古墳とは時間的にあまり隔たりのないものと考えられる。

吹田五反島遺跡出土の鳳凰　大阪府吹田市南吹田五丁目に所在する五反島遺跡から「瑞花鳳凰麒麟象猊紋鏡」と称する鏡が出土した。この鏡は平安時代初期の河道から検出されたものである。[20]

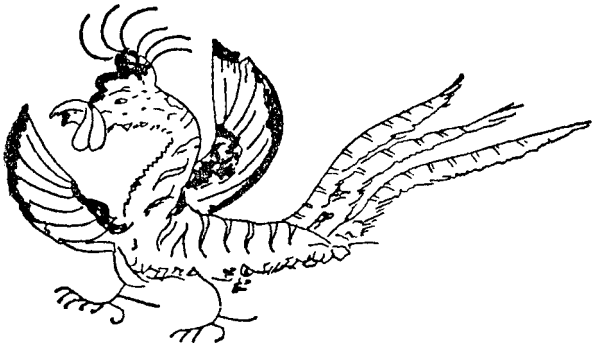
鏡の文様のなかに一対の鳳凰が浮彫されているうちの右側の鳥の姿態である。嘴、肉垂があり、頸を後方に曳き、主翼羽を大きく拡げ後羽の上に伸ばす。脚をみると右脚は少し曲げているが、地上を踏み、左足は少し曲げて上げる。指の表現をみるとまぎれもなく歩行である（第30図）。

第29図　正倉院宝物御軾の鳥

第30図　吹田五反島遺跡出土の鳳凰

薬水里壁画古墳の朱雀図　朝鮮民主主義人民共和国平壌西郊の江西郡薬水里に所在する薬水里古墳の壁画の朱雀図と注記される鳥形がある。[21]鳥は頭頂の鶏の単冠あるいは花形冠と思わせるような曲線が六本施され、冠毛が表現されている。そして目の前には鼻、嘴があり、その下には大きな肉垂がある。逆「S」字状の頸に頸羽、胸羽があり、尾羽は三条の長い尾羽が描かれ、脚は左足を地につけ、右脚を大きく上げる。足には四本の指と後方に跗蹠をつける。

翼は大きく上に拡げ、特に右翼は三列の風切羽根を描いている。この形態は頡頏前の歩行であろう（第31図）。



第31図　薬水里壁画古墳の朱雀図

漢代瓦当の朱雀　前漢の瓦当と称される遺物があって、朱雀に対する玄武の文様を表したものや青龍、白虎もあって、四神の瓦が葺かれていたことが知られる。ここに挙げたものは西安市付近で出土した朱雀の文様をもつ瓦当である。[22]

第32図　漢代瓦当の朱雀

頭頂部から二条の冠羽のよ

第33図　河南省南陽県出土画像石の朱雀

うなものを靡かせ、顔面には大きな眼や嘴を刻し、主翼羽を拡げ、尾羽をあげる。両脚は逆「く」字形に表現しているが、左右の足が前後し、異なる状況が見られるから静止というよりも「歩行」と理解した方がよいと思う(第32図)。

要するに前漢代からかかる朱雀の容姿があったことを物語る図像であるといえる。

河南省南陽市出土画像石の朱雀

一九七三年四月、日本中国文化交流協会と日本経済新聞社で主催された「中華人民共和国河南省画像石・碑刻拓本展」[23]に出陳された南陽県出土の画像石で南陽漢画像館に所蔵される画像石に朱雀を彫刻したものがある。大きさは三八糎×一五〇糎で「桃抜」と標記されている。

朱雀は左右の脚をあげ、歩行する姿相である。尾羽も長く表現されている。孔雀を思わせ、時代は漢代とされる(第33図)。

陝西省綏徳県蘇家圪垯漢墓の鳳凰　ここに挙げた資料は陝西省綏徳県で検出された石室の入口にある画像石の扉に相当する部分である。

楣、両側の柱、楣に種々の画材が彫飾されているが、その観音開きの扉の環の上に彫刻された左右一対の鳥がある。[24]恐らく鳳凰を意味しているものと思われる。

第34図　陝西省綏徳蘇家圪垯漢墓の鳳凰

鳳凰は頭頂に冠羽にあたるものが表され、両翼共に大きく広げ、尾羽も長く伸ばし、その先端を丸味に表現する。両脚のうち片脚は地を踏み、反対の片脚は開けて曲げている。容姿からすれば「歩行」を示しているものと思われる。年代は恐らく後漢(東漢)代(一～二世紀)と考えてよいであろう(第34図)。

江蘇省唐代石刻の鳳凰　江蘇人民出版社編『中国古代図案選』に掲載された「唐代石刻鳳凰・巻草紋」に「歩行」する鳳凰文が見られる。[25]

左右対称のように見えるが図像は異なる。頭頂の冠羽をみると、右側と左側では少し違うことが分かる。また頸羽をみると、左側の図像は弧線を描いて後方に棚曳いているが、右側の象は下に垂れる。さらに、脚の様子をみると、左側では左脚を真直に立て、右脚は上にあげる。その角度は直角状になる。対する右側の象は右脚を立てるがやや曲がり、左脚は上にあげるがやや鈍角となって斜めにさげる。

このように明らかに対称的でないように刻されるが、頸部には共に

第35図　江蘇省唐代石刻の鳳凰

「×」印の頸飾がみられる。唐代の鳳凰の歩行の姿を彫刻している例となる（第35図）。

なお、これとほぼ同じ図像は『中国歴代装飾紋様』（長安出土）にみられる。

集安四神塚玄室南壁の鳥　報告書『通溝』に「玄室南部梯形持送側面壁画細部（図版第九〇）」に逆位置で挙げられる鳥の絵がある。[3] これは右脚で大地を踏み、左脚を真直に前方にあげ伸ばした図像である。顔部に汚れがあってよく分からないが、頸羽、胸羽を描き、尾羽は大きく上にあがる。羽翼は通例の如く大きく開く主翼羽を描いている。片脚を直角に前に出す姿態は静止のようにも見えるが、躍動性があるので、「歩行」の分類に入れた方がよいと判断する。獣面鳥体の図である（第36図）。

第36図　集安四神塚玄室南壁の獣面鳥身

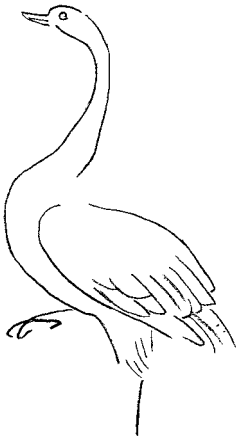
墓門朱雀図　町田章氏が『古代東アジアの装飾墓』のなかで挙げられた「墓門の朱雀線刻」（図五八　唐の四神）に「七一六年につくられた墓門を飾る朱雀があり」がある。[4]

この朱雀図は頭頂部に「バラ冠」、「クルミ冠」と思わせるような冠毛があり、頸部に複線の「×」字形の文様をつけ、胸部から腹部に毛羽を描く。

左脚を垂直に立て、地を踏みしめ、右脚は鋭角の「く」字形に曲げる。主翼羽は左右に大きく拡げ雨覆羽、風切羽を描き、尾羽は大きく丸く上に伸ばす。しかし、右脚をあげている点集安四神塚の持送りに描かれた先の例とも共通する。これら片脚を大きくあげる姿は静止図とも看取れるが、鳥の生態からすると、「歩行」と見て分類する方が適切であると思う（第37図）。

第37図　墓門朱雀図

楊玄略墓壁画の鳥　銀青光録大夫、行上柱国侯であった楊玄略は、咸通五年（八六四）歿し、西安郊外の棗園村に埋葬された。墓はかなりひどく崩壊し、壁画も殆ど残存しないが、墓道東壁柳樹人物図や西壁に文吏図、墓室には侍女図が描かれ



第38図　楊玄略墓壁画の鳥

ている。[25] そのなかの墓室に四壁に仙鶴図があるが、この鶴は左脚を垂直に地に立ち、右脚を前方に向いて伸ばしている。鳥は「歩行」の一幅であるが、時代としては晩唐に近い作である（第38図）。

四

次に頡頏の姿態を表現する朱雀や鳳凰文がある。これを第三類型とする。辞典によれば、「頡頏」の「頡」とは「鳥がとびあがる。頏の対」とあり、「頏」とは「鳥飛下。とびくだる。頡の対」とし、「頡頏」とは「鳥が飛び上がり又、飛び下る」と説明している。すなわち鳥がまさしく飛翔しようとする寸前の姿、あるいは空中の飛翔から着地する時の姿勢と考えることができる。四神として表現される場合は「頡」の姿とした方が理解はよいだろう。管見であるがその事例を挙げておく。

飛鳥キトラ古墳の朱雀　今回のキトラ古墳で確認した南壁の朱雀図は、いままさに飛翔しようとする寸前の姿態を描いた躍動的な朱雀図といえる。

まず、頭頂部を見ると長い曲線で冠羽が描かれている。これは従来の朱雀や鳳凰図にあまり見ることのなかった表現である。[26]

嘴については浸水のための汚れがあって鮮明ではないが、精悍な眼、大きく耳朶、そして肉垂、見るからに躍動する鳥を描いている。頸から胸部、そして腹部にかけて羽毛、尾羽は五本で長い。この表現は壷阪寺の鳳凰塼や江西中墓・大墓などの高句麗古墳壁画などの鳳凰の尾羽根の形態とは異なる。

第39図　飛鳥キトラ古墳の朱雀

両翼をみると恐らく雨覆羽と風切羽を意識して描いているようで、特に朱点のような文様は江西中墓の右袖部に描かれた朱雀図や中国法門寺門楣に彫刻された鳳凰の向かって左側の鳥の主翼にも同様な表現がみられる。よくは分からないが時期的なものかも知れない。

脚をみると鳥伸すなわち右脚は力強く直線上にのばし、地面を蹴ったような様相、対して左脚は鋭角状に曲げている。この脚は朱雀が将に翔び立とうする瞬間、すなわち「頡」の状態を表現したものと見るのが最も通じているのではないか（第39図）。

従来の朱雀、鳳凰のよう装飾的な図像ではなく、極めて写実性を示しているものとも理解できよう。

奈良薬師寺本尊台座の朱雀　奈良市西ノ京薬師寺の本尊薬師寺如来像の台座にある朱雀図もキトラ古墳と同様「頡頏」のうち、「頡」の姿を表現したものと考える。[27]

頭頂部の冠羽は一見二つの瘤状のものが見られるから、「三枚冠」あるいは「単冠」といわれるものに相当するかも知れない。開いた眼、鋭い嘴、そして胸から、力強く後方に伸ばした左足、対して右脚は鋭く曲げる。この姿勢は大空を悠々に飛翔するのではなく、いわゆる頡頏と見

第40図　奈良薬師寺本尊台座の朱雀

第41図　八角鏡　漆背金銀平脱の鳥

るべきであろう。

なお、主翼羽は三段になり雨覆羽、風切羽を表し、三条の尾根が後方に棚引く。こうした主翼羽、尾羽さらに胸から腹部、左脚の様相からみて、鳥が飛びあがろうとする躍動の瞬間を写実的に描いたものと思う（第40図）。

八角鏡　漆背金銀平脱の鳥　正倉院蔵八角鏡第一二号の白銅製、金銀平脱文様の鏡に鳥の文様がある。この鏡は寛喜二年（一二三〇）一〇月二七日の盗難によって五片に破損したもの接合し復原された。[8]

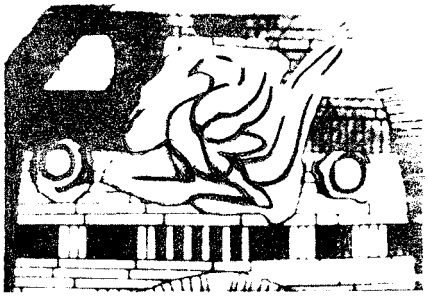
八花文の弁に冠羽を靡かせ、両翼を大きく拡げ、右脚を逆「く」字形に曲げ、左脚を力強く後方に伸ばした鳥が表されている。脚の開き方だけをみると、キトラ古墳の朱雀に通じるところがあり、頡頏と見てよいだろう（第41図）。

なお、その図像の上に花印鳥の飛翔する鳥を表している。

正倉院金銅水鳥形飾具　正倉院南倉（一六五―一七）に登録される水鳥形の飾具がある。金銅板に鏨で鳥形を透彫したもので、表裏共に同じ文様が刻まれている。用途としては嘴の先端と、眼、反対側の尾羽に二箇所の小孔があるから垂飾として用いられたものであろう。[8]

鳥形は頭頂部に冠羽をつけ、眼と鋭い長い鳥喙をもつ。頸及び胴部は逆「く」字形に曲げている。飛翔とも考えられるが、ここでは頡頏と見る（第42図）。

第42図　正倉院金銅水鳥形飾具



第43図　百済公州宋山里六号墳の朱雀

百済公州宋山里六号墳の朱雀　韓国忠南道公州市は百済時代熊津城の所在した旧都である。その公州市街地の西北、宋山里には武寧王陵をはじめ著名な古墳が群在するが、そのうちの一基に宋山里第六号墳がある。この古墳の石室内には漆喰で描かれた四神図のあることは早くから知られていた。[27]

石室は南に向かって開口する塼積みの横穴式石室で羨道と玄室からなるが、

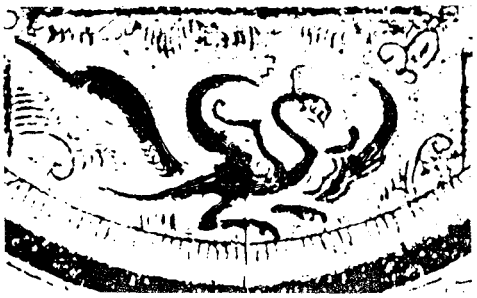
第44図　魏胡明相の墓誌の朱雀

石室の南壁、羨道の見上げの部分の上方に朱雀図が描かれている。塼積みの南壁に漆喰で描かれた壁画であるから不鮮明であるが、それを見ると朱雀は通常とは反対の東を向き、逆「S」字形の頸から胸、大きく拡げた主翼羽、長く、高く伸びた尾羽を表す。

脚は両脚共、逆「く」字形に曲がって表現されている。「頡頏」の瞬間を描いたものとも理解されるので、一応ここに挙げておく（第43図）。

魏胡明相の墓誌の朱雀　『中国墓誌精華』（中田勇次郎編）に収録されている孝文帝昭儀胡明相墓誌蓋」にすばらしい四神図が彫刻されている。墓誌銘によれば、墓主は北魏孝明帝の孝昌三年（五二七）四月一九日死去、同年五月二二日埋葬されたとある。[28]

朱雀の顔面には眼、嘴、頭頂には長い冠羽を表し、左右の主翼羽を大きく拡げる。この羽根は通常とは異なって風切羽を表現し、飛翔寸前の様相を描いている。脚をみると両脚とも曲げているが、左足の爪先をみると揃えて下を向けているのに対し、右脚の指は大きく開いて左右の表現が相違している。これからみると静止とするより、頡頏の姿態とみることができる（第44図）。



第45図　長沙隋墓出土鏡の朱雀

長沙隋墓出土鏡の朱雀　長沙隋墓群で出土した三面の鏡のうちの一面の四神鏡で、報告書によれば「半球形鈕、寛辺。四面有青龍、白虎、朱雀、玄武四神図像。辺上有銘文「團團宝鏡、皎皎昇臺、鸞鵠自舞、照日花開、塩池似月、覩皀（影）嬌来」という美しい情景を表す銘がある。朱雀の図像は頸を「S」字状に曲げ、両翼を拡げ、尾羽を棚曳かせ、両脚を曲げて、まさに飛び立とうとする頡頏の姿を表している。隋代の事例として貴重である[31]（第45図）。

宝鶏市法門寺地宮の鳳凰文　中国宝鶏市の郊外扶風県に名刹法門寺が所在する。別名阿育王寺とも称され、釈迦の遺骨を受けて造寺造塔が行われ、北魏時代には隆盛したが、北周武帝の三武一宗の廃佛をうけた。その後一時復興したが、隋大業年間に兵火に羅災、壊滅状態になった。しかし、唐貞観五年張亮らによって復興、則天武后などの敬崇をうけ信奉された。

一九八七年、崩壊した一三層塔の再建が行われるあたり、塔の地下地宮の調査が行われ、その際刊行された『法門寺』に「地宮第一道石門上的朱雀門楣」が挙げられ、写真を掲載すると共に、「門楣為唐咸通一四年（註、八七三年）充修地宮時用残碑刻成。朱雀是吉祥的四神鳥之一。

第46図　宝鶏市法門寺地宮の鳳凰文

表示正南方向」と解説している。[33]

そこに掲載された朱雀図をみると、双鳥が刻されて左右若干表現の相違はみられるが、殆ど同じ図形であるが、頭頂部の冠羽に相違がある。また主翼羽を見ても羽根の表現に違いがあることがわかる。嘴は鋭く、尾羽は豪華に表現されている。

脚を観察すると向かって右側の鳥は右脚を、左側は左脚を地に着するが、各々反対側の脚は「く」字形に曲げて「頡頏」の姿勢を示している。

いずれにしても、法門寺の朱雀は唐代における代表的なものといえるであろう。キトラ古墳の朱雀の姿勢に通じるものがある（第46図）。

史思礼墓誌蓋の朱雀　荘武将軍、右龍武軍翊府中郎将であった史思礼は天宝三年（七四四）歿し、西安市東郊郭家灘に埋葬された。その墓は一九五五年発見された。墓室には四神図のほか牡丹図など花文様が描かれていた。

四神のうち朱雀図は顔は後方を振り返り、頭頂には冠羽、顔には目、鋭い嘴をつける。

第47図　史思礼墓誌蓋の朱雀

第48図　豆廬建墓誌の朱雀

墓が一九五三年咸陽市底張湾で検出された。墓室には墓誌があり、その蓋石に四神が彫飾されていた。

朱雀は顔面を反対方向に向け、頸や胸も反対を向き異様な形をなしている。両翼は大きく開くが、脚を見ると、左脚は力強く地を蹴り、伸びており、右脚は曲げている。後脚の状態、特に左脚の指、爪の状態からみて「頡頏」と考えられ、キトラ古墳の様相に相通じるものがある（第48図）。

郯国大長公主墓誌の朱雀　貞元二年（七八六）、五八歳で死去し、貞元三年咸陽底張湾に埋葬された郯国大長公主、粛宗の女の墓が一九五三年発掘された。墓室には四神、雲紋等の彫刻があったが、その中の墓誌

第49図　郯国大長公主墓誌の朱雀

胸を張り、両翼羽根を大きく拡げる。尾羽も長い。脚をみると左脚を「く」字形に曲げ、右脚は後方に力強く伸ばす（第47図）。

豆廬建墓誌の朱雀　天宝三年（七四四）に歿した「十馬都尉、豆廬建の

蓋に朱雀図が刻されている。

朱雀は顔を振り返り、主翼羽を大きく拡げている。脚の様子であるが右脚は鋭角に曲げている。左脚は腿部は後方に伸ばしているか、跗蹠は地を蹴って伸ばしているか、それとも前に曲げているのか、よく分からないが、図像の状況からみると、前者に思われる。伸ばすか曲げるにしても歩行でもないし、飛翔でもないから、飛び立った瞬間の「頡」の姿勢を表現していると思われる（第49図）。

五

飛翔する朱雀、鳳凰図像がある。これを第四類型とする。その事例として次のような資料を挙げることとする。

中宮寺蔵天寿国繍帳の鳥　奈良斑鳩の中宮寺蔵国宝「天寿国繍帳」に飛翔する鳥が刺繍されている。[12]

第50図　中宮寺蔵天寿国繍帳の鳥

第51図　正倉院銀薫炉の鳥

第52図　八角鏡　鳥獣花背の鳥

第53図　正倉院蘇芳地金銀絵箱の鳥形文

鳥の頭頂には冠羽があり、眼、肉垂もある。翼は大きく開き、鳥挙の姿勢である。雨覆、風切羽も表す。尾羽も長く靡く。両脚は後方に揃えて伸ばす。まさしく飛翔の態を表現している（第50図）。

正倉院銀薫炉の鳥　北倉一五三に銀薫炉一合がある。銀鍛造透彫で半球状の身と蓋が合さつで球形状になる。その蓋の表面に二頭の獅子と二羽の鳳凰が表されている。[8]

鳳凰文は頭頂に長く靡く冠羽があり、眼と鋭い嘴、両主翼羽は大きく搏き、尾羽は大きく、長く表す。双脚は後方に強く伸ばしており、まさしく飛翔する鳥を刻している（第51図）。

八角鏡　鳥獣花背の鳥　南倉（七〇）に収納する白銅鏡第一二号である（前出）。

このうち飛翔の鳥は斜上方よりみた姿勢で冠毛を靡かせ、丸い眼、鋭い嘴がある。主翼羽は前側に雨覆羽、後方には風切羽を表している（第52図）。

第54図　円鏡　雲鳥飛仙背の鳥

正倉院蘇芳地金銀絵箱の鳥形文　中倉にある「蘇芳地金銀箱」の底裏に綬帯をくわえて飛翔する鳥が描かれている。頭頂には霊芝冠が描かれ、後頭には冠羽があり、顔には鋭い目、環帯を喰む嘴、主翼を拡げて羽搏き、尾羽は大きく上にあがる。[8] 両脚は下に向かって揃えて鳥伸、飛翔の姿勢である（第53図）。

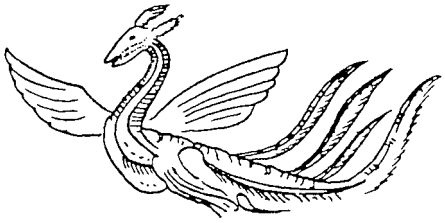
円鏡　雲鳥飛仙背　北倉四二、第一七号鏡の文様である。白銅製で鏡背には円鈕をめぐって仙人を乗せた飛鳥が四箇所に回旋させ、その間に山岳文を配する。[8]

鳥は羽根を上に大きく拡げ羽搏き、両脚は揃えて後方に伸ばす。曲型的な飛翔の姿である（第54図）。

正倉院蔵葛形裁文の鳥　南倉一六―二七と数えられる金工品が二五枚所蔵されている。なかの鳥形文様一点である。銅板を切通したもので、裏面に衣の破片が付着する。各所に留金があるから裂幡のようなものに取り付けられていたものと考えられる。[8]

第55図　正倉院蔵葛形裁文の鳥

第56図　真坡里第一号墳の鳥



第57図　天王地神塚の獣面鳥身

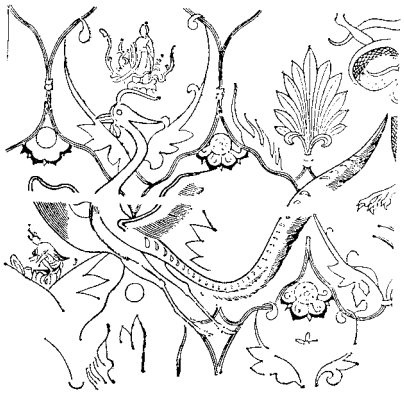
鳥は頭頂に冠羽が靡き、丸い眼を鋭い嘴、下顎には肉垂がある。主翼を大きく拡げ、大空を飛翔する姿を上方から表した形につくられている（第55図）。

真坡里第一号墳の鳥　朱栄憲氏が雲文比較図を事例として挙げられる図の中に朝鮮共和国平安南道中和郡戊進里にある真坡里第一号墳の飛翔の鳥がある。冠羽はキトラ古墳の朱雀に似て、両翼を大きく拡げ空を飛翔する鳥を描いている[12]（第56図）。

天王地神塚の鳥　平安南道殷山郡（旧順川郡）北倉面松渓里にある天王地神塚はかつて梅原末治氏が「構造の複雑となったものとして特に指摘するものが若干あります」としている古墳を挙げ、実測図を挙げて詳しく説明している。[13]

この古墳の壁画に飛翔する獣面鳥身の動物が描かれているが、顔面はともかく鳥身の部分は両翼羽を拡げ、尾羽を靡かせ、両脚は揃えて、腹に添えて後方に伸ばす。まぎれもない鳥類飛翔の姿である（第57図）。

集安五號墳四号墓壁画の朱雀　中国集安地区には数多くの壁画古墳が



第58図　集安五號墳四号墓壁画の朱雀

所在するが、そのうち五號（塊）墳四号墓（旧「通溝未編号墳」）と五号墓（旧「通溝一七号墳」）の玄室入口側の袖部に朱雀図が描かれている。但し四号墓について、現在未公開である（五号墓は実見可能であり、二回にわたって現地踏査した）。これらの古墳壁画については、『朝鮮古文化総鑑』にも概要が紹介されており、四号墓については『考古学報』一九八四年一期、四、五号墓については『考古』一九六四年二期で報告されている。

さて、四号墓は花崗岩の切石で構築され、墓道、羨道、玄室からなる。朱雀図は袖部の墓室より羨道を向いて南壁に描かれており、頭頂に長い冠羽があり、丸い眼、嘴が描かれ、主翼羽は左右に拡げ、尾羽は長い。脚は双脚共に揃えて後方に伸ばしている様相で分かるので、これは飛翔の姿勢である（第58図）。

永泰公主墓の翔鳥図　唐永泰公主（李仙蕙）墓は唐中宗李顯の第七女であり、高宗李治と則天武后の孫女にあたる。大足元年（七〇一）一七歳で歿したが、死因については病死、迫害死などの見解があって詳らかでない。神龍二年（七〇六）夫である武延基と合葬された。乾陵の陪塚的位置にある。

一九六〇年、発掘され、埋葬主体部は墓道、甬道、前室、後室からな

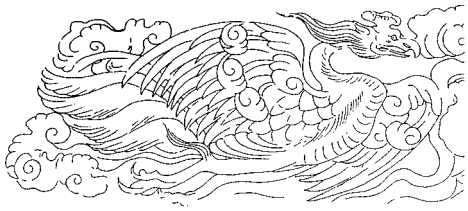
第59図　永泰公主墓の翔鳥図

第60図　唐節愍太子李重俊墓の鳥形文

り、全面に壁画が描かれているが、特に前室東西両壁に描かれた宮女図は有名である。

その壁画のなかに、後甬道上に描かれた雲鶴図があって、空を飛翔する鶴の絵が描かれている。説明するまでもなく、両足を後方にのばし、羽根を拡げる華麗な丹頂鶴である。八世紀初頭の古墳壁画のなかで見事に飛翔する絵画の代表的なものといえよう（第59図）。

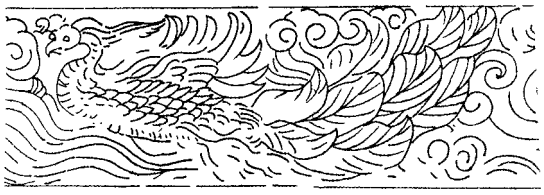
唐節愍太子李重俊墓の鳥形文　節愍太子は唐中宗の第三子にあたる。懿徳太子李重潤の弟にあたる。一時、皇太子の地位にあったが、武三思との政争、破執が起こり、一応勝利はしたものの、再びの抗争によって敗死した。[55]『旧唐書』によると、景雲元年（七一〇）に「贈皇太子、謚曰節愍、陪葬定陵」とあり、墓は陝西省富平県宮里郷南陵村にある。その墓室には多くの壁画が描かれているが、前甬道と後甬道巻頂に飛鳳図がある。頭頂には冠羽があり、頸部には×文様をつけ、羽根を拡げ、両足を後方に伸ばし、大空を飛翔する雄姿を描いている（第60図）。



第61図　高元珪墓誌蓋の朱雀

高元珪墓誌蓋の朱雀　被葬者高元珪は右威衛将軍贈陳留郡大守の身分で天宝一四年（七五五）歿し咸陽底張湾に葬られた。その墳墓は一九五三年発見され、納められていた墓誌の蓋石には花文、雲文のほかに四神図が彫飾されていた。そのうち朱雀をみると頭頂に花形冠を付し、鋭い眼や嘴を表す。「S」字形の頸から胸、腹と続き、主翼羽は力強く搏く。

第62図　段府君（段文絢）墓誌蓋の朱雀



第63図　梁府君（夫人）墓誌蓋の朱雀

両脚は腹に沿って後方に揃えて伸ばし、まさしく鳥の飛翔する姿を描いている（第61図）。

段府君（段文絢）墓誌蓋の朱雀　殿中省尚薬奉御翰林供奉であった段文絢は大中三年（八四九）歿し、西安東郊韓森寨に埋葬された。一九五六年、墓が発掘され、墓室に納められた墓誌を検出、蓋に四神図が彫られていた。そのうちの朱雀図は顔面に大きな円形の眼、嘴があり、胸部は大きく、羽根を拡げて羽搏いている。尾羽も長い。脚は胴の下に沿って後方に伸ばし、飛翔の姿を表している（第62図）。

梁府君（夫人）墓誌蓋の朱雀　梁夫人は宦官の女で大中八年（八五四）逝去し、西安東郊韓森寨に埋葬された。一九五四年その墓が調査され、墓室に墓誌が納められており、その蓋石に四神図が刻されていた。

朱雀の頭頂には冠羽があり、優しい丸形の眼、先端の尖った鋭い嘴、主翼羽を拡げ、尾羽は豪華に大きく表現されている。

双脚は共に腹部に沿って後方に伸ばし、飛翔の姿を刻している。時代が下るためかやや精彩を欠く感がある（第63図）。

六

明日香村キトラ古墳で朱雀図が確認された際、この朱雀が「躍動的」「躍動する朱雀」「飛び立つ姿」「壁に躍動神の鳥」といった用語でその姿態が伝えられた。確かにキトラ古墳の朱雀は飛び立たんとする躍動的なものであるが、これも一種の表現であって、朱雀図のなかには他の容姿もあるから全体としてどのように考えればよいかという問題意識をもった。そこで朱雀、鳳凰を表した図像をアジア各地の各時代の代表的な資料を聚成し、分類しようと試みた。ただ、この種の資料は枚挙に遑まない程多くあるが、できる限り、日本、朝鮮（高句麗、百済）、中国の地域的、時代的、典型的なものを挙げ、問題に対処しようと試みた。勿論資料の収集に脱漏のあることは承知しているが、それは今後更に努力したいと思っている。

聚成した資料をその図像の姿態によって、①静止、②歩行、③頡頏、④飛翔に分類した。それによって芸術的表現活動の主題や方法に感性があるのではないとも考えた。それは一つの目指す方向としての試論であると思っている。例えば金基雄氏は江西中墓の「朱雀」の解説のなかで、

二種類に大別される。その一つは舞踊塚、三室塚、天王地神塚、双楹塚などで見られるように、技巧にこだわらず自由で活蕩な傾向のあるものであり、他の一つは通溝四神塚、通溝一七号墳、江西大墓、江西中墓などで見られるように、技巧にとらわれ、構図においても複雑性をおびたものである。後者は主に大きな壁面に一対の朱雀を描くが、嘴に蓮花・宝珠などをくわえさせるか、二脚の下に蓮花座、または三神山を配するなど追加的なものが多くなるばかりでなく、尾羽根の先端が上に向って曲り、二脚も細くて長くなる。江西中墓の朱雀図で見るように、鋭く繊細な線で多様な躍動感を与えているのがその特性と言われよう。

と述べている。[21] これも一つの見解である。

さて、聚成の過程でキトラ古墳の朱雀図をみると、特徴として頭頂部の長い冠羽、そして鋭い眼の表現である。頭頂の冠羽はこれほど長く、力強い描写は他にほとんどない。主翼や羽搏きは朱雀、鳳凰図の通例として見られるが、脚の様相は宝鶏法門寺の鳳凰の飛翔図や西安史思礼墓、豆廬建墓、郯国大長公主墓などの脚に通じるものがある。

なお、問題点としては「歩行」と「頡頏」の区別の難しいものがあるということである。

今こうして朱雀、鳳凰の類例を挙げたところ、キトラ古墳における朱雀図は一羽の頡頏の姿を描く鳥であるが、高句麗古墳壁画として著名な江西大墓、中墓等の朱雀図をみると、通常鳳凰図と称される相対の鳥を描いているということと、これらの朱雀図は明らかに静止の姿態である。だとすると高句麗古墳壁画とキトラ古墳とは本質的に相違するものであり、キトラ古墳壁画の源流を高句麗古墳に求めることは無理であろうと考える。これは玄武図においても同様であり、単に朱雀図や玄武図が描かれているからといって図像の比較検討を経ないで両者を結びつけることに危惧がある。さらにキトラ古墳や高松塚古墳の壁画を描いた人物として高句麗からの渡来人あるいはその系統の人物を想定することは必ず

しも正鵠なものとはいえない。なお、高句麗古墳においては鳥というより獣面鳥身を表した徳興里古墳、薬水里古墳、天王地神塚などの壁画が多い。但し、中国でも江蘇省鎮江の東晋の画像石にもある。

朱雀図の類例を集成して考えたことは、キトラ古墳のような頡頏を図示した朱雀や鳳凰図は他にも見られる。第三項に挙げた頡頏図をみると、第四一図に挙げた正倉院宝物金銅水鳥形（南倉一六五―一七）や韓国公州宋山里六号墳（第四三図）などのように両脚を揃えて飛び立とうとする姿やキトラ古墳のように片脚で地を蹴り、片脚を曲げた図像もある。後者の事例は正倉院宝物（南倉四二）八角鏡漆背金銀平脱第一二号鏡（第四一図）、魏胡明相墓誌の朱雀（第四四図）、宝鶏法門寺門楣の朱雀（第四六図）、西安東郊出土の史思礼墓誌の朱雀（第四七図）、咸陽出土の豆廬建墓誌の朱雀図（第四八図）、咸陽出土の郯国大長公主墓誌の朱雀（第四九図）などである。このように頡頏図の二種類があると思う。なかでも類似の形態をとるものを強いて挙げれば宝鶏市の名刹法門寺の地下宮殿の楣石に刻された鳳凰像であると思う。特に比較を容易にするために同じ向きの向って左側の鳥の姿勢を挙げると共通する点が見られる。法門寺の鳳凰は恐らく唐代の八世紀に造刻されたと思われるから、参考にすべき点であろうと考える。なお、正倉院宝物中の「築地鳳形錦御軾」も八世紀代のものであることはいうまでもない。だからといってこの法門寺門楣石の一例を挙げて中国からの直接的な影響と断言することは避けたいが、高句麗古墳壁画江西大墓、中墓の両脚を揃えて静止する高句麗の朱雀図よりは近似することは確かであると思う。最近発表された成城大学の上原和氏は「キトラ古墳『朱雀』図の祖型」と題する文中[8]で「なかでも最終期の南浦市江西三墓にある江西大墓、中墓の『朱雀』図に最も近い」とし、「しかし、相違する点がないわけでもない」と述べ、特に玄武図について「中墓の『玄武』図の亀は、あたかも馬のように四脚で立ち、蛇が亀の胴体を二回巻いている」と明確な相違を認める一方で、中国山西省寿陽県で発見された北斉（五五〇～五七七）の庫狄廻墓、河北省磁県で発掘された東魏武定八年（五五〇）の茹茹公主墓の壁画と比較し、高句麗江西大墓、中墓とは墓室の構造が違うとして「キトラ古墳の壁画を、なんの確証も根拠もなしに唐の影響と見做す論者の年代説のなんと安易なことか、と思う」とされる。しかし挙げられた東魏、北斉の六世紀代の壁画の事例、高句麗江西大墓、中墓の壁画（上原氏は江西大墓を高句麗第二五代平原王〈在位五五九～五九〇〉の陵墓とみているとされる）からだけで、他説を一蹴して排斥、排除されることは果たして正しいか。上原氏はこれらの朱雀図をみてどう判断されるであろうか。キトラ古墳の築造年代観も合わせて、もう少し慎重であってほしいと願うものである。

なお、補足ながら上原氏は同書において「キトラ古墳を一八年間も放置してきたこと自体が、すでに古墳の破壊である。」と記されているが、これは地元の事情を全く理解していない人の中傷であって、機を改めて厳しく批判したい。

【註】

① 奈良県立橿原考古学研究所『壁画古墳高松塚』昭和四七年
② 明日香村教育委員会『キトラ古墳―学術調査報告書』平成一一年
③ 池内宏・梅原末治『通溝』（巻下）昭和一五年
④ 簡野道明（増補）『字源』昭和四七年
⑤ 諸橋徹次『大漢和辞典』昭和四三年
⑥ 白川静『字統』一九八四年
⑦ 奈良県高市郡役所編『奈良県高市郡志料』大正四年
奈良県高市郡役所編『奈良県高市郡寺院誌』大正一三年（一辺約四〇・三糎、厚さ約八・五糎）
⑧ 正倉院事務所『正倉院の金工』宮内庁 昭和五一年
⑨ 毎日新聞社『原色版国宝（5）』「平安Ⅲ」昭和四三年
⑩ 吉林省博物館「吉林輯安五㶲墳四号和五号墓清理略記」『考古』一九六四年二期
⑪ 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院『徳興里高句麗壁画古墳』講談社 昭和六一年
⑫ 読売テレビ放送編『好太王碑と集安の壁画古墳』昭和六三年
⑬ 鎮江市博物館『江蘇鎮江の東晋画像塼墓』一九七三年
⑭ 河南省文化局文物工作隊『鄧県彩色画像磚墓』一九五八年
⑮ 陝西省文物管理委員会「唐三原県双盛村隋李和墓清理簡報」『文物』一九六六年第一期
⑯ 東京国立博物館・ＮＨＫ編『唐の女帝・則天武后とその時代展』一九九八年
⑰ 群馬県立歴史博物館編『唐墓壁画集錦』一九八九年
⑱ 宮内庁正倉院事務所編『正倉院紀要』第二一号表紙（大山朋彦製図）平成一一年
⑲ 奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩藤ノ木古墳―第一次調査報告書』平成二年
⑳ 吹田市教育委員会『五反島遺跡の発掘調査』昭和六一年
㉑ 朱栄憲『高句麗の壁画古墳』一九七二年
㉒ 陳遵彤『中国天文学史』Ⅱ 一九八二年
㉓ 綏徳県博物館「陝西綏徳漢画像石墓」『文物』一九八三年第五期
㉔ 町田章『古代東アジアの装飾墓』昭和六二年
㉕『中華人民共和国河南省画像石・碑刻拓本展』一九七三年
㉖ 陝西省博物館編『唐代墓誌紋飾選編』一九九二年
㉗ 奈良六大寺大観巻第六『薬師寺全』一九七〇年
㉘ 軽部慈恩『百済遺跡の研究』昭和四六年
㉙ 中田勇次郎『中国墓誌精華』昭和五〇年
㉚ 法門寺博物館『法門寺』一九九四年
㉛ 中国科学院考古研究所総編「長沙両晋南朝隋墓発掘報告」『考古学報』一九五九年第三期
㉜ 大橋一章『天寿国繍帳の研究』平成七年
㉝ 梅原末治『朝鮮古代の墓制』東亜古墓制の研究第二部 昭和二二年
㉞ 吉林省文物工作隊「吉林集安五㶲墳四号墓」『考古学報』一九八四年第一期
㉟ 陝西省文物管理委員会「唐永泰公主墓発掘簡報」『文物』一九六四年
朱章超『唐永泰公主壁画集』一九六三年
㊱ 陝西省考古研究所編『陝西新出土唐墓壁画』一九九八年
網干善教「唐節愍太子墓壁画の鳳凰図について」『阡陵』第四〇号

平成一二年
㊲ 金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』一九八〇年
㊳ 上原和「キトラ古墳朱雀の祖型」『飛鳥に学ぶ』飛鳥保存財団 二〇〇一年